

東京キングダムセミナー⑩2023030708

前半

はい、それでは、今日7月8日のキングダムセミナーを始めたいと思います。

今日で東京キングダムセミナーは、第10回目になります。これまで、聞かれて、いかがでしょうか。この東京のキングダムセミナーは、火曜日のLINE集会でやってきましたその土台の上にあります。これまで、本を3回、3クール読んで学んできました。最初から参加されている方、途中からの参加の方もいらっしゃるでしょう。だんだんと食欲が増してこられて、皆さんの食欲に応じて、詳しくなり、そして、量も増えてきたと思います。特に東京でのここ10回の学びは、今までの本の学びのスピードからいえば、ものすごくゆっくりです。それにはやはり、それなりの意味がありまして、頭の端っこで「ふんふん、わかった、わかった」っていうことでは済まされない内容であります。本当に。それをだんだんと、皆さんが消化しつつここまで来たと思うんですけれど、どうですか？今日の話しを始める前に、何か先月の話を、セミナーを聞いて、またこれまで聞いてきて、こういうふうに今思っているとか、こういうところに私は、今ウエイトが大きいとか・・・というコメントなどありますか？今日の話しを聞いて、今日の終わりに「質問ありますかと言われても困ります。」「今日聞いたところ、それを消化するのに精いっぱいなのに、そうやすやすと質問コメントありませんよ」と言われてしまうんです。(笑)今までのところで、もしありましたら、聞かせておいてください。なければ無くていいんですよ。ハイでは・・・、

これまで、創世記の方を並行して合わせて、読みながらこのセミナーの主題に入ってきているんですけれど、これまで、「霊と魂の話」をよくしましけれど、なんでそれをしつこくやったかというところ、この「主との一致」というテーマで、「私たちと主とどういう関係なのか」というところの前段階として、そこに入る私たちのウオーミングアップのために、「我々の魂の中に主の霊が住まわれる」ということを書いてきました。本に書いてある通りなんですけど、そこを、どうぞ大事に思ってください。

「聖霊が与えられるから、聖霊が来たから、そして聖霊の言う通りに、導かれてやればいいんですよ。」と、言っちゃあそれまでなんです。いや、いや・・・、その言い方の中に、漏れているところが沢山あるんです。じゃあ、それは何かということ、それを抑えながら、《イエスの中にいる私》(P23)というのを先月やりました。そして、今日は、《私の中にいるイエス》というテーマに入っていこうと思います。

さあ、この間から、よくホワイトボードに書いていた絵を思い出して下さい。ここに、創造の時に、神様がひとりの人間を造られた時、ひとりの人を土地のちりで形造り、その鼻から、何を入れと書いてありますか？「いのちの息」を入れたんですよね。「そうすると、その人は生きものとなった」と書いてある。神の「息」、神の「霊」がアダムの中であって、「神に似せて」造られて、「知性があり感情があり意思があり、気持ち」である「魂がある」わけですよ。そして神の霊がその中に「置かれて」「生きた者となった」と書いてある。そうしたら、我々の、私という心、気持ち、そして霊と言うものが「神の霊」というものが、「一緒になって生きていた」と書いてある。

ところが、アダムは魂を持っていたんだけど、その魂は神様の言いなり、「瓜二つ」だったかと言うと、皆さんの知っている通り、「自由意志」と言うのがあったわけですよ。そのように神様はアダムの心を造って、で、どうしたかって言うと、「ベリーグッド」と言ったわけですよ、そのベリーグッドなアダムの心で今度、蛇の誘惑をエバが受けて、二人でそっちに足を踏み入れて

しまったという話ですよ。

そしたら、「そんな間違ような心を造らなきゃ良かったじゃない。」とか、昔からよく言われるのが、「そんな罪を犯すように造らなければいいじゃない、なんで造ったの」って、単純にそういう話になっちゃうことがある。それに対してもう皆さんは答えられますよね。

神が「良し」とされた人間を、神様は、どれだけ信頼されておられたか。どれだけその人を認めておられたか、ということをね。

それから、我々がよく言うのが、「私たちの魂、肉と言うものが汚れてしまったのよ」、「人間というのは、罪を犯したから、このままだと、滅びるのよ」「だから、救われなければいけないのよ」と言うんです。そうなんだけど、そこで考えなければならぬのは、「魂」の部分、罪に汚れたと知って救われて、生き返って、変えられる、ということになるんだけど・・・このところ、どうなんですか？

これまで、創世記の3章を過ぎて4章のところをまだ詳しくやってないけど・・・、4章のところ、カインとアベルと言うのが出てきますよね。で、「カインが捧げものを捧げ、そして、アベルも捧げた。神様はアベルの捧げものに目を留められた。ところがカインの捧げものには目を留められなかった。そこでカインは怒った。」そういういきさつが書いてありますが、皆さんは、この「カインとアベルの話」の中で、どこを注目するように教えられてきましたか。

また、「罪を犯した人間だから、もう、殺人が始まったのよ」と、「やっぱり、ね。」と、そういう結末になりましたか？私が今、何を言わんとしているかと言うと、「天地創造から墮落に至って、神様が人間の心をどう見ているか」ということをやっているんです。いいですか。

「サタンに騙されました」と言って、裸だったのを「恥」として、服を着て、神の目から逃れた。そしてエデンの園から出た。その過程において、神様がどんな気持ちだったか、アダムとエバがどんな気持ちだったか、と言うのは、すでにこのセミナーで言いました。聞いてなかった方は、どうぞ、過去のことを聞いてください。そして今言っているのは、次の4章よ。

4章のウエイトが何にあるのかと言うことなんです。よく言われてきたのは、カインは「野の作物」を捧げたが、アベルは「羊」を捧げた。神様は、後に贖いとしてひとり子を捧げる予定だったから、その心を知ってアベルは、それを捧げたのだと言う考え。だから、アベルの捧げものを神様は喜ばれたんだと。なので、私達が神様に喜ばれるためには、「何を捧げるべきかということが重要だよ」と、捉えることもできなくはない。

だけど（別にここを深く突っ込もうと思わなかったんだけど、言い始めちゃったから・・・）、

4章3節を見て下さい。「ある時期になって、カインは、地の作物から主への捧げ物を持ってきたが、」4節「アベルもまた、彼の羊の初子の中から、それも最上のものを（自分自身で）持ってきた。主はアベルとその捧げ物とに目を留められた。」5節「だが、カインとその捧げものには、目を留められなかった。」というこの箇所、で、「ほらやっぱり、地の穀物より、羊なんじゃん」と言いますか？だけど、いいですか、この文脈で「穀物と羊」となっているけれど、じゃあ、お父さんお母さんの「アダムとエバ」はどうしていたんでしょうか。アダムとエバはどうしたかとは、言ってないんです。とう突に、ここに捧げものの話が出て来ているのだけど、なるほど、後々モーセ五書を読めば、羊を捧げるというのが如実に出てきます。「だから、ああ、この頃から神様はそう教えていたんだろうか。」というふうに見てしまうけど、いいですか、この書き方をズームで

アップしてみてください。

残念ながら今日ここに、ヘブライ語の原文を持って来ていませんが・・・、3節の「カインは地の作物から主への捧げ物を持ってきた」これ、このまま、単純な文章です。ところが、同じ「持って来た」アベルの描写は、カインとは違うんです。4節に「アベルもまた彼の羊の・・・」って、これね、日本語訳でもわざわざこう訳してあるからには、ここを特に強調してあるということを見抜いてください。アベルは、「彼の」羊の「初子の」中から それも「最良のものを」それも「自分自身で」持ってきたと、書いてある。何？この4節のしつこい言い方。カインの描写と全然違うんです。創世記を呼んだ時に何回か言いましたけど、皆さん、同じようなことを、並行的に書いてあるのに片方だけ妙に込み入って書かれてある時は、書いてない方は書いてあるほどではなかったと、判断できる。そういう対比の上の強調がそこにあるということ覚えておいてください。

ここも単純にツラーっと、読んでしまえばそのままだけど、見て下さい。いいですか。4節の後半、主は何を見たんですか？主は「アベル」と「その捧げもの」に目を留めたと書いてある。お金さえあれば、いくらでも豪華で高価で善い捧げものが出来るんじゃないですか。なので、捧げものに目が入るのは当然だけど、捧げた本人、「アベル自身」に目を留めたと書いてある。だから、一般的に創世記4章で語られてきた物語の古事を、つらつらっと、思い描くだけでは、ここにある真意が読み取れません。

ちょっと戻って言うと、ヘブライ語の原典を見たことのある人は、4節のそれも最良のものをというところの言葉が、「ヘレブ」=脂肪となっているんです。羊の脂肪、油のことです。「ほら、脂肪を持って来てんじゃん。わざわざ自分で解体して・・・」「じゃあ、やっぱり、捧げものにしようとして、脂肪を持ってきてんじゃん。」という話になりがち、言いたくなるけど、この単語「ヘレブ」には、その脂肪たち、数ある脂肪たちの中から持ってきたという意味も含まれていて、さらに、この“脂肪”と言うを、わざわざ使っている、言い回しは・・・いいですか、単純に「油」を指す場合もあるけど、ほとんどそれを意図するのは、最上のもの、最良のものを指す言い方なんです。ですから、ここでも日本語訳で「最良のものを」と、訳してある。ヘブライ語をちょっと見たことのある人は、ちょっと、ひっかかるころだと思しますので、それを今説明しました。その脂肪という言葉を使うのは、その「脂肪たちの中から」持ってきたという言い方は、もう肥え太った丸々贅肉たっぷりの、(笑)ぶくうーっと太った羊を持ってきた、「選んで」、そういうことです。つまり、「アベル」が「自分自身で」「初子の中から」「最上の丸々太ったもの」を「自分で」「持ってきた」と、言いたいわけです。*「自分自身で」と訳していない翻訳もあります。多くの翻訳では「自分自身で」と訳せる原語を重んじていません。しかし、「自分自身で」という意味を現わす原語がありますので、敢えて、その意味を汲み取っています。

6節、「それで、主はカインに仰せられた。『なぜあなたは憤っているのか、なぜ、顔を伏せているのか、7節あなたが正しく行ったのであれば、受け入れられる。ただし、あなたが正しく行っていないのなら、罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋い慕っている。だが、あなたはそれを治めるべきである。』 7節の「罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋い慕っている。」って、ちょっと待って。「罪があなたを恋い慕って待っている」っていうけど、聖書で、「罪」っていう言葉が出て来るのは、ここが初めてなんです。今まで出てきた事がありますか？3章のここで初めて罪と言うのがでてきて、「あんたは罪人だからもうダメだ」と言っているんじゃないんです。

「あなたが正しく行っていないのであれば、罪があなたを待ち伏せしている」と言っているんです。カインは、ベソをかきながら、「いやいや、神様、私の父と母はエデンの園を追い出されて・・・、いや、もうあの頃から、私達は罪の中におりまして・・・」と、ぼそぼそと言ったんでしょうか。神様の言っているのは、「罪はあなたの戸口で待ち伏せして、あなたを恋い慕っている。だが、あなたはそれを治めなさい」と言っているんです。アダムという造られた心、神様は自分のパートナーとして造ったアダムの魂を、愛しておられる。アダム以下の子孫の中で、魂がその人の中で、どんなに力を持っているのか、何が出来るのか、と言うことを神様は、信頼しておられるんです。

「治めるべきである」と書いてあるけど、この訳し方も微妙なところで、「あなたはそれを治めるからである」と言うふうなニュアンスにもとれる。「あなたはそれを治めるであろう」という、未来形の肯定的な言葉にもとれる。

同じように「十戒のことば」は、「刻んだものを拝んではならない」、「主の御名をみだりに唱えてはならない。」「主の御名をみだりに唱えなくなる。」「偶像を拝まなくなるだろう」、という神の宣言のこもった未来形の肯定的な命令になる。

ところが、ここでカインは、「神様ごめんなさい」という一言が出ない。そうしないで逆切れでしょ。ここで、この物語のウエイトがどこにあるかですが、カインは、「このように地をさまようものになった」というんだけど、後々読めば、カインの子孫をずっと神様は、やっぱり、その魂を追っかけておられるわけでしょ。ね、それゆえにですよ。後にノアが現れた時、その前の6章の初めにこういう言い方が出て来る。6章の3節、「そこで、主は、『わたしの霊は、永久には人の内に留まらないであろう。それは、人が肉に過ぎないからである。それで人の齢は、百二十年にしよう。』と仰せられた。」いいですか。神様は、アダムの内に置いた霊が、サタンの支配の中に入ることによって、もう、人間の霊と神の霊が繋がってなくなったことは承知の上で、それでも、その人たちの心に期待をした。その中から、主の名を呼ぶものも出て来たけれど、けどもついに、人が肉に過ぎないからだという、極致に至ってしまったという、そこでノアの箱舟の話が出て来る。

だから、私達は罪を犯して、「ああ、もう駄目だから。」「もうそれで、全然だめだから」「私たちの魂はもう何の役にも立たない、汚れて、肉で、・・・」と、そう思って投げ槍になって、・・・そのあと、キリストの贖いによって、聖霊が我々の内に生きることによって、我々は、救われ、生き返って、変えられるのだということになるんだけれど、さてさて、・・・。

「私」と言う絵をまた見て下さい。私の中に魂があって、そして、私たちの魂が、心が、主イエスを受け入れるという決心をした後、その拍子に主の御霊が我々の中に入って、生き返るでしょ。そしたら、我々の中に聖霊がいて、聖霊が、もによ、もによ、もによ一つと、大きくなって、聖霊がうわ一つと、我々を支配して、そして我々の言うこと、しゃべること、見ること、走るところ、手を出すところ、みーんな聖霊のなすがままになるんですか？ 聖霊が我々を支配するんですか？ 違いますよね。では、一番最初に聖霊は我々の内側に来てくださって、我々の内で何をするんですか？我々の内側で、「我々の心を助けて下さる。我々の内側に来て、我々のために「執り成し」て下さっている。何が、強くなるため？我々の魂の部分（感情・知性・意思・気持ち・その心の部分）が変えられて、強くせられて、聖霊に根差して、動けるように、働き始めて

下さっているのが、聖霊なんです。

ローマ書8章のところを先月読みました。ローマ書8章、すごいですよ。皆さん。どうぞ聖書に穴が開くほど読んでみてください。また初めから読みたいけど、そんなことしたらまた時間が無くなりますから、はい、16節「私たちが神の子供であることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいませ。17節もし子供であるなら、相続人でもあります。」(これは、小さい子供ね。)
「私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人であります。」18節「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに掲示されようとしている栄光に比べれば、とるに足りないものと私は考えます。」19節「被造物も、切実な思いで神の(成熟した)子どもたちの現れを待ち望んでいるのです。」20節「それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。」21節「被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。」

神の子の現れのきっかけとなり、鍵となり、原動力となるのは何ですか? 「聖霊ですよ」と言っている。だから何よりも、神の御霊として、子として、我々が神の成熟した子として、我々の魂が聖められ、成熟させられ、強くせられて、元気にせられていくことが、神が第一に始められたことなんです。

23節「そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心(魂)の中でうめきながら、(成熟した)「子にさせていただくこと、すなわち、私たちの体の贖われることを待ち望んでいます。」(我々はそれを、その成熟を待ち望んでいます。)25節「忍耐をもって熱心に待ちます。」26節「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいませ。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいませ。」27節「人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみ心に従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。」

これほどまでに、神様は、我々の魂に期待をしておられる。ですから、聖霊がきたならば、そりゃあ、いろんな御霊の業というのがありますよ。奇跡があり預言があり啓示があり、・・・いろんな目をとめるべき、驚くべきほどの神の働きが、そこにはあるけれど、でもね、神が幻を見せたり夢を見せたり預言を与えたり啓示を与えたりするけれど、その共同体の中に、あるいはその人の中に、しっかり御霊によってとりなされ、理解し、悟り、判断力がついていく、そういう魂の成熟がなければ、聖霊の奇跡的な現れを、どうして見分けられるのでしょうか、ということです。聖霊の驚くべき神の業を、我々は吟味できない。もっと言うなら、この世の中にもろもろの霊力があり、サタン・悪霊の手下どもの霊がうじょうじよいる。それをしっかりと落ち着いて、感じ取れる、見分けられる聖霊によって育てられた魂に私たちはなっておく必要があります。

我々が魂で目覚める以前、つまり主に会おう前に、思い出して下さい。主に会おう前に、私たちは何に動かされていましたか。これはユダヤの哲学者もしょっちゅう言うことであり、またヨーロッパの西洋哲学者もそういうことをよく言っていることなんですけど、人間の赤裸々な現実をよく表しているんです。

下さっているのが、聖霊なんです。

ローマ書8章のところを先月読みました。ローマ書8章、すごいですよ。皆さん。どうぞ聖書に穴が開くほど読んでみてください。また初めから読みたいけど、そんなことしたらまた時間が無くなりますから、はい、16節「私たちが神の子供であることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。17節もし子供であるなら、相続人でもあります。」(これは、小さい子供ね。)「私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人であります。」18節「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに掲示されようとしている栄光に比べれば、とるに足りないものと私は考えます。」19節「被造物も、切実な思いで神の(成熟した)子どもたちの現れを待ち望んでいるのです。」20節「それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。」21節「被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。」

神の子の現れのきっかけとなり、鍵となり、原動力となるのは何ですか? 「聖霊ですよ」と言っている。だから何よりも、神の御霊として、子として、我々が神の成熟した子として、我々の魂が聖められ、成熟させられ、強くせられて、元気にせられていくことが、神が第一に始められたことなんです。

23節「そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、(魂の中でうめきながら、成熟した)「子にさせていただくこと、すなわち、私たちの体の贖われることを待ち望んでいます。」我々はそれを、その成熟を待ち望んでいます。25節「忍耐をもって熱心に待ちます。」26節「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。」27節「人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみ心に従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。」

これほどまでに、神様は、我々の魂に期待をしておられる。ですから、聖霊がきたならば、そりゃあ、いろんな御霊の業というのがありますよ。奇跡があり預言があり啓示があり、・・・いろんな目をとめるべき、驚くべきほどの神の働きが、そこにはあるけれど、でもね、神が幻を見せたり夢を見せたり預言を与えたり啓示を与えたりするけれど、その共同体の中に、あるいはその人の中に、しっかり御霊によってとりなされ、理解し、悟り、判断力がついていく、そういう魂の成熟がなければ、聖霊の奇跡的な現れを、どうして見分けられるのでしょうか、ということですよ。聖霊の驚くべき神の業を、我々は吟味できない。もっと言うなら、この世の中にもろもろの霊力があり、サタン・悪霊の手下どもの霊がうじょうじょいる。それをしっかりと落ち着いて、感じ取れる、見分けられる聖霊によって育てられた魂に私たちはなっておく必要があります。

我々が魂で目覚める以前、つまり主に出会う前に、思い出して下さい。主に出会う前に、私たちは何に動かされていましたか。これはユダヤの哲学者もしょっちゅう言うことであり、またヨーロッパの西洋哲学者もそういうことをよく言っていることなんですけど、人間の赤裸々な現実をよく表しているんです。

それは、今まで神に向っていた人間の霊・魂は、関係を切られて神に向かわずに他に向いていったその頼りない状況を一言でいってきました。それは何だと思えますか。それは《無方向性》だということです。方向性がない状態。どっちに向いてよいか分からない状態。それをその人は「気ままで自由でいい」と言うんだけれど、どっちに向いてよいか分からないんです。

キルケゴールという哲学者がいてね、人間はこうを歩いて行くでしょう、歩いて行くと陽が差している、陽が差していると、「ああ、今日はいい天気だ！この光ってなんだろうか」と言って、そっちにふらふら一と行って虜になるんです。そしたら、今度気持ち良い風がふわ～と吹いてきた。それを感じたら、「あ、この風気持ちいい！なんだろうか」って、そっちにふらふら一と行って虜になるんです。で、庭に綺麗な花が咲いていた、そこの横通ったら、「ああ、この花なんて香りがいいんだろうか！」と言ってその虜になる。そうやって何日、何年、何十年と過ごしていくんだと。つまり、手当たり次第、出会うものに虜になって、「ああだ、こうだ」と言っていく。それを《無方向性》であり、方向の定まらなさのゆえに、自分を浪費させ、あたかも充実しているかのように見えるけれども、自分を疲れさせる“死に至る病”だと。

だけどその無方向性の魂に、一つの方向性を与えてくれるのが、燃えるような「神のことば」ということなんです。もっと言えば、「御霊とともに我々にやって来てくれる神のことば」なんだと、それによって、一つの方向性が見えて、向き合うべきところが見えて、我々は変わっていくのだという。

「罪」っていうのは、「的外れ」ですから・・・。方向性が与えられたけれど、次ですよ問題なのは、方向性が与えられるというのはまだあり得るんです。でもその次の課題がね、我々にもっと大きいんです。何でしょう。方向性は与えられたけど、その方向性を見たまま握ったまま私たちの心は、「ぼやーん」としてしまふんです。分かる？「ぼやーん」とするって、(笑)つまり、《優柔不断》なんです。私たちの心は、みことばが来ても、聖霊がそれを思い起こさせても、どっちつかずの優柔不断さを抱えている。それで、自分の心の“習性”にしたがって、時を無駄に過ごしてしまおうとするんだと。

「この聖書のみことば、うんうん、読んだことあるわ」「聞いたこともあるわ」と思って読むけど、それが自分の優柔不断さを突き破って、自分の内側で「うん！このみことばを噛みしめてやろう！食べてやろう！消化してみよう！」と。そういう『つかみ取る魂が幸い』です。聖霊は、あなたの中で、我々の中で、それをひっきりなしに焚きつけて下さっているんです。

さっき、歌を歌いましたよね。『主の祝されたいのちのことば、我々は食べて喜び歌おう』という、この歌詞を単に読んで、「はい、理解できました」というレベルではないんです。じつと神のことばの中で、それを自分の肉となり血となり、胃の中で消化できるようになるまで食べていく、そのように主は神のことばをあなたに祝福されましたよということですよ。

ご飯食べる時に皆さんは、感謝の祈りをしますか？しますよね。私は子供が小さい時に、よくその感謝の祈りをしました。「この食事を主よ、感謝します。この食事が我々の力となり栄養となり、体を造るようこの食事を祝福します。」と、食事を毎食祝福して食べてましたよ。感謝だけでなく、それは実際食べ物だけれど、でも主の祝されたいのちのことばを我々は食べましよう。」というその深さに至ることが必要です。

このパルースシアの時代に主は、神の子どもたちを「神の成長した子供たち」に引き上げるために、神のことばを今、祝福して解き放っておられます。さあ乾いている者は「来て食べなさい」そして「成長しなさい。」「目が開かれていきなさい。」「これまでの2倍も3倍も解き放たれていきなさい」ということです。なにも、いいですか、いろんな聖霊の奇跡が2倍も3倍も起これと言っているんじゃないですよ。それは後からついて来るし、あるんですけど、何よりも我々の霊的な目が開かれていくことです。我々のすべての周りの関係性の中に。まず主との関係性の中に、イエス様との関係の中に、聖霊との関係の中に、そして兄弟姉妹との関係の中に、家族の関係の中に、今までとは全然違うヴェールが剥がれた、「ああ、そうだったのか」という濯がれた目が見えるように、そういう時代が来ていますよ。しばしばクリスチャンの中で、「聖霊、聖霊」って言って、「要は、聖霊に満たされればいいでしょ。」「聖霊に導かれればいいでしょ。」と言われるのを聞く時、私は、単純にその言い方に、物凄いやぼったさを感じています。

聖書が、『聖霊に満たされよ』と言う時、その背後には、その前提には、これだけ聖書が積み重ねて語ってきたその魂的作業の重要さがある。聖霊に反抗して魂の習性に従って、どんどん活発にやっていくということになると問題です。それこそ魂の業離れ、十字架にすぎなければなりません。御霊に根ざした我々の生きた魂が、成長して現れていくことです。いいですか、あなたを見る人は、あなたの周りの聖霊を見るんじゃないんです。あなたの人格の中に、存在の中に、光り輝き、あふれ出てくる聖霊を、あなたの魂を通して感じるんです。いいですね。

今の時代、非常にいろんなそれこそ、聖書の預言、時代を見分ける様々なメッセージ、解き明かし、社会的なものがあふれかえています。そういうけれど、私に言わせれば、今だけじゃあないんだけどね。どの時代でもおんなじようにあったんだけどね。今生きている私たちは、「今か、今か」とそう思うんだけど、神の臨在が濃厚になるにつれて、そのへんの見分け方も、ますます「聖化」を必要とされています。鋭さが・・・、だから、そこを叫び求め、そこを掴み、我々は宣言するのです。信仰を謙虚に、深く、与えられたものを持ってね。はい、これが、今まで言ってきた《主との一致》の序文です。「え？それで序文かい」と突っ込まないでください。これが、本では結構、はしょっている序文です。

では、何で神様が、そんな構えでおられるのか、というと、それは、神様は愛すべきアダムを造って、いのちの息を入れて、「良し！」とされた、『ベリーグッド!』と言われたそのアダムの中に、全人類を見ておられるお方だからです。

何回も言っているように、『イン・クライスト』『キリストにある』『キリストにあって』と、いう言い方、その言い方は、神様が愛すべき、アダムの中に、アブラハムの中に、ダビデの中に、ナザレのイエスの中に、ご自分の計画を込めた、世の初めからのご計画を込めたものを、見ておられる、そういうふうに見るお方なんです。アダムの中に神様は、全人類を見ることしかできないんです。だから、イエス・キリストの中に全人類を見ておられるんじゃないですか。

いい？そうでなかったら、なんで、あの2000年前のパレスチナで、あのみすぼらしい姿で十字架にかかった、ナザレのイエスが、あなたと関係あるんですか。え？そうじゃないですか？「関係ないじゃないですか。そんな2000年前の人が、何で私の罪、赦されるの？」そう、未信者の

方から質問されたことはないですか？「なんで？関係ないでしょ。」でも神様は、アダムの中に全部を見ておられ、アブラハムの中に選民を見ておられ、イエス・キリストの中に私たちを見ておられる。私達は、そのような共同体、体、集合人格の中に、主は見ておられるんです。

ですから、「自分一人がそこにおる、神様どうしましょう。私、生きて行けません。困りました。これからどうしましょう。孤独です。」と思っても、神様から見たら、「あなたを神の国の共同体の中に見ているよ。」「あなたが一人孤独だと言っているけれど、いや、いや、神の国の共同体の中にあなたを見ていますよ。」「あなたがその目を開きさえすれば、あなたの霊もお兄さん・お姉さん・妹・弟・子供たち・お父さん・お母さんもう、いっぱいいるよ。」「目を開きなさい。目を上げなさい。」そういうことなんです。

だから《イエス・キリストの中にいる私》というその真理が聖書を読めば、いっぱい出てきます。“私の中にイエスはおられ、イエスの中に私はおられますよ。互いが互いの中に存在していますよ”というこの現実が、我々の今、この時代このところで生きて行く自分の生活の現実に勝る啓示になることを解き放ちます！皆さんの上に。皆さんの現実に、皆さんの魂に、それを宣言します。アーメン！

「私はそれを受け取ります」と言いますか？「私は、それを受け取ります！」もうそれは当然じゃないですか。あなたの得意な「いえいえ、そんな、そんな」と言わないでください。「私なんか、私なんか」なんて、もう冗談じゃない。「よし！私こそをそれを受け取ります。有難うございます。感謝します。当然です。しっかり受け取りました！」このステージの上に立つことです。神の国のステージの扉がそこから開きます。

《主との一致》という《キリストにあって》というところ、24ページ25ページ、この間ほら、綺麗な本の中にぼろぼろの紙切れが入って、というのをしましたよね。度々聞いただろうし、私があっちこちでそれを実演しているところを見た方も多いいと思います。自分でもどうぞ、やってみて下さいね。「私」と書いて、(笑)「はい、それが私です。」いい？で、

26ページ《キリストにあって・・・》、《主にあって・・・》《キリスト・イエスにある》

28ページ《勘定しておきなさい》と、聖書がそうってんですよ、いいですか。

ローマ6章の11節、このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだものであり、神に対してはキリスト・イエスにあって（このあってという言葉に鈍感になりそうだけど、日本語で。これよーく注意してね、ぐるぐる○をしてもいいです。）

「キリストの中にならって」生きた者だと、思いなさい。この「思いなさい」という言葉は下に説明が書いてあります。「数えられた、勘定された」という、断定的な強い言い方なんですよ。「そうじゃないんだけど、仮に思いなさいよ」と言っているんじゃないんです。「キリスト・イエスにあって、生きたものだと思えよ！」「絶対そうだからな」と言っているんです。」

確定申告したことあるでしょ。無いですか。私、青色申告よ。3月になると、本当に申告な話になるんです。青色申告で、まだまだ・・・、帳簿と格闘してさ、で最後の最後に、3月15日前のギリギリにその計算が合って、ちゃんと今年度の収益というのが出て、税金いくらいくら、所得税が出て、それが出て、その下に定規を当てて、ぴーと、線を引くんです。その時の快感。「終わったー！」「もうこれで、解放されたぞ！今年は・・・」と思って、ほんと、やっとこの前、解放されたのに、もう7月で半分過ぎちゃって、インボイスとかいって、どうなるんだよ。ね、

まあ、そこはいいですが、・・・とにかくね、決算の時、「ハイ、ここまで」と、ピーと線を引く感じ。(笑)「ロギゾマイ」、この言葉は、「勘定しておく」という、そういう強い言葉なんです。

このしっかりした啓示がね、私達に変化をもたらす。人の励ましとかなんとかじゃなくてね。神様の啓示の中に自分がすっぽり入った時に我々は癒しを受ける。解放を受ける。もやもやした、どろどろしたものから抜け出せるんです。なんだそんなことで悩んでいたのかと、神の愛の広さ、ながさ、高さも深さが、どれほどのものであるか。どんな被造物も私たちの主イエス・キリストの中にある神の愛から、平安から、私達を引き離すことは出来ません。

このローマ章8章はね、もう、ポン、ポン、ポンと断言的に強く書いているんです。本当に強い言葉で。マルチン・ルッターが、ドイツ語訳聖書をつくったんですが、わたしはドイツ語を知りませんけれど、ドイツ語をよく読む人は、「もう、ものすごい勢いで、訳している」って言ってました。だからあれは、パウロの鼻息+マルチン・ルッターの鼻息だろうと言っていました。(笑)だからここは、「もうこの何も我々をキリストの愛から引き離すことは、出来るもんかー！」っていう感じ。ねえー、いいですか。

ここまでで、29ページまでいったことになります。今日は読んでないけどね。

じっくり、皆さん、ね、この話を今日聞いて、1回聞いて、「よしよし」と思っちゃあ、甘いですよ。ほんと。録音があったらどうか、何回か聞きましょう。そして、自分の腹に消化できるのを確認しましょう。

さて、30ページから《主との一致》のもう一方の面、《私の中にいるイエス》というこれがあります。これはまた、後半にやりますけれど、とにかく今のところを、「イエスの中に自分が見られ、自分が存在しているんだ」という啓示、そのうんと前に、世界が創造された前から、我々は神様の中に見られていたということ、神の中に自分は見られているんだよということ、それを受け止めましょう。

だから急いでね、次々と、思わないようにしましょうよ。だからほんとうはさ、今日の前半のこの話で、後半も踊り続けようかなと言う気分なんですけど、それじゃああんまりね、だから先に進むけどさ、いざ目覚めるものよ、我がうちにありて、喜び、楽しみなさい。その中にとつぷりある者が、この次の30ページからの方に進むことができます。

後半にいきましょう。

さあ、ここで《主との一致》というのを、本では、二つの面で、説明しています。

22ページの中ごろに、下記↓

《主との一致》—イエスの中にいる私 — (イエスにゆだねられた私)
 \私の中にいるイエス — (私にゆだねられたイエス)

《主との一致》というのが二つに分けて、イエスの中にいる私 — イエスにゆだねられた私、主に包まれた私です。もう一方は、私の中にいるイエス — 私にゆだねられたイエス、です。

もう長らくここまでセミナーを聞いてこられた皆さんは、この二つを並べて驚く方はいらっしゃらないと思います。いいですね。『イエスの中に私は見られていますよ』で、いいですか、サタンも、イエスの中にいるあなたを見ているということです。だから何を恐れる必要があるんですか。そうですよね。サタンは、栄光を受けた神の子主イエスに完敗しています。彼は敗残兵であり、完全に勝利した主イエスの前に手も足もだせない。そのイエス様の中に、あなたは置かれ、見られているのですよ。

そうは言われても、「私、恐れてしまうんですよ」と、いいますか？「そうは言われても私、ビビっちゃって、ねえ」って。そこはさっき言いましたように、我々の魂の造り直し、修正力、成熟度、聖められる度合い、そういうものが後から付いて来ますから。いいですね。

無方向性の状態から、「あなたは神の中に、イエス・キリストの中にいる」と、方向付けが来たんでしょ。それに対して我々の問題は何かと言いました？方向付けを持たなかったのが、持ったのはいいけれど、それに対して優柔不断な自分の心が、課題なんです。それが、その方向付けのゴールに、届かなくしてしまうと言っているんです。

だから、「よし、そう、神の言葉で宣言していることを、私のものだと私は決心しよう」「そう見てやろう」「そして、そこに歩んで行こう」「そう、進んでいこう」と、我々の心が決心すればするほど、その神の言葉は我々に熱く、熱く、深く、定着していくのです。それで、我々の血となり肉となっていくのです。

優柔不断の「ぼやー」とした思いでね、みことばを聞くことの習い性は、本当に人を足踏みさせます。後退させます。いい？「なんで私はこうなんだろうか、先生祈ってください」祈りませんよ、そんなもん。それだったら、祈ったってすぐ元に戻るじゃん。そうでしょ。祈ったって家に帰ったら戻ってるじゃん。ね。

本当に受けるべき、やるべき一步一步のトレーニングを、自分の魂が身につけていくことを、みことばは進めているでしょ。「聖霊が、聖霊が・・・」って、「神様がしてくれます」って、そりゃそうですよ。主はその方向に持って行って下さるけど、神様はあなたの魂、心、気持ちを信用していらっしゃる。大事なものとして保っていらっしゃる、見ていらっしゃるんです。ですから、神の言葉で宣言していることを、私のものだと自分が決心すればいいんです。

御霊を送ってその御霊の武器を、武器に御霊の思いに自分の足を差し込んで、そこに断ち切って、御霊の想いを汲んで、御霊とともにあなたの魂が、動くようになればなるほど、その判断力、理解力、洞察力が身に付いてくるのです。

方向性を失っていた自分が方向性を今、持った。持った人ばかりがこれを今聞いていらっしゃると思いますよ。でもその次です。神様は、送った聖霊ばかりに注目しているのじゃありません。初めにいましたように、我々の大事な、大事な魂の部分に要点を置き、それを大事に見ておられる。期待していらっしゃるんです。

で、御霊と魂が一つとなって立ち上がって神のパートナーとして、これから創り上げていく、築き上げていくのだと、自分の魂を、成熟させることを忘れて、この世からエスケープすることばかりを 考えることを“良し”とされますか。それを指折り数えて良いと言っていますか。我々は到達すべきところがいっぱいあるんです。まだまだ、ね。

*質問に答えられて、(エスケープすること⇒今の煩雑な我々の現実、苦勞あるこの現実の中か

ら逃げ出すこと、神様早く連れてって下さい。連れて行ってくれるのは何月何日ですか・・・等)

23 ページ、主との一致《イエスの中にいる私》、ここに、みことばがいっぱい並べてあります。もう何回も読んできたと思いますが、23 ページの上の方に、みことばをそのままあげてあるみことば、下記↓

「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、

キリストとともに葬られたのです。(ローマ 6:4)

「もし私たちが、キリストにつきあわされて、キリストの死と

同じようになっているのなら、・・・。」(ローマ 6:5)

「私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、・・・。」

(ローマ 6:6) という言い方。

「もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、

キリストとともに生きるようになる、と信じます。」(ローマ 6:8)

「罪過によって死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、・・・。

キリストにおいて(中で)ともによみがえらせ、ともに天のところに

すわらせてくださいました。(エペソ 2:5) すっごいことが書いてあります。

「もし私たちが、彼とともに死んだのなら、彼とともに生きるようになる。」(Ⅱテモテ 2:11)

「・・・私には、キリストを得、またキリストの中にある者と認められ・・・。」(ピリピ 3:9)

いっぱいこういうことがあるでしょう。こんなにあるのにね、私たち、それを意識しておしゃべりしていますか？もうそんなことは、ばあーと忘れて、「ねえー、大変よねえ。」「もう、なんでこうなのよねえ」「祈ってね」と、祈りますよ、祈るけど、「これどうなのよ」っていう話になりますよね。でしょ。慰めと楽しみになるんだろうけれども、その私たちのクリスチャンの下手なおしゃべりが、私たちを引きずりおろしているということに、だんだん気が付いてきました？ひどいこと言うね、今日はね。「ごめんね。」でも本当ですよ。シャキッと、口をつむぐところはつむんで、キリっとしたら、グンと前進するのです。ハイ、で、

24, 25 ページ、《はい、それは私です！》これはもう、ご存じですよ。

(28 ページ)《勘定しておきなさい！》先ほど、言いましたね。

30 ページを開きましょう。主との一致《私の中にいるイエス》では次に、《私の中にいるイエス》とは、どういうことでしょうか。まず、先に挙げたみことばを再び開きましょう。Ⅰヨハネ 3 章 24 節です。

「神の命令を守るものは神のうちにおり、神もまたその人のうちにおられます。神が私たちのうちにおられるということは、神が私たちに与えてくださった御霊によって知るのです。」

御霊がうちにいるかどうかを私たちは自分の生身の感覚で知ることはできません。それは信仰によって確認するものです。何かの体の反応とか現象とか、そんなことばかり期待していると、それは信仰によることではないので、目に見えるものや感覚で確認できるものであったら、信仰がなくても全部それでわかりますよね。でも第一にそうではないということを、しっかり掴んで

おきましよう。異言はどうですか。「異言が出るから聖霊が中から・・・」っていうでしょ。異言が、異言がって、言うじゃないですか。間違っているんですか。ほら、前半で言いましたように、そういう異言でさえも一つのしるしで、それを主導で追っかけていると、そこで足をすくわれますよ。本当に聖霊が我々の自分のうちにあるという、確認を自分の信仰の霊と魂で、出来るかできなにかというところに、潜みこんでおかないとだめです。なんでも現れた者によって、踊ったり歌ったり、騒いだりし始めると、言った通りですよ、御霊による魂の成熟なくして、外側のものだけで、判断するということは、吟味が聞かなくなります。もちろん御霊によって、聖霊によらなければイエスを主ということもできなければ、御霊によらなければ、異言も出ないでしょう。

はい (30 ページの続き)、

あなたのうちに主がおられるという証拠は、あなたのうちに与えられた聖霊だということは明白です。それでは、聖霊とは一体どのような働きをするのでしょうか。みことばから、そのまま、並べてみます。

すべての事を教える。(ヨハネ 14:26)

イエスの話したことを思い起こさせる。(ヨハネ 14:26)

イエスについてあかしをする。(ヨハネ 15:26)

すべての真理に導き入れる。(ヨハネ 16:13.14)

やがて起こることを示す。(ヨハネ 16:13.14)

イエスの栄光を現わす (ヨハネ 16:13.14)。

イエスのものを受けて知らせる。(ヨハネ 16:13.14)

主と同じ姿に変えていく。(II コリント 3:18)

↑ (聖徒のためにとりなしをする。含む) ローマ章 8 章 (26-27 節)

聖化させる。

(さっき読みましたローマ章 8 章 (26-27 節) の“聖徒のためにとりなしをする”というのは敢えて入れていませんが、この II コリント 3 章 18 節、“主と同じ姿に変えていく”という中に含めているつもりです。)

ということは、イエスの考え方、理解、知識、人格、能力に私たちを至らせてくれる、これが聖霊の働きだということです。生まれ変わりをした当初は、イエス自身の持つておられた知識や理解とかけはなれていましたが、聖霊の働きによって、徐々にイエスの姿に近づいて行くことができます。そしてついに、イエスの知識と私たちの知識は同じになり、信仰も同じになるのです。この最後のところ、「ええ？」って思う人がいるかもしれません。ちょっと待っててください。自分のうちに治めながら・・・。

これはごく当然なことです。なぜなら、(I コリント 6 章 17 節) 主と交われば一つ霊となるのです。ということが現実だからです。すなわち、イエスの中におられる御霊と、あなたの中におられる御霊はひとりのお方ですから、そこには「イエスの御霊の一致」が確立されているわけです。1「御霊の一致の土台」があれば、次は II「信仰と知識の一致」が成立します。これがエペソ 4 章での順番でした。霊のレベルで一致をもたらした聖霊は、次に信仰と知識のレベルでの一致へと私たちを進ませます。 いい? 真剣に読んでいこうね。

さて、ここで《私の中にいるイエス》の内容の中で、最も重要な理解に進まなければなりません。エペソ4章を再び開きましょう。聖霊は、信仰の一致と知識の一致に私たちに至らせてくれるというのですが、問題はどのような種類の信仰と知識なのかということです。「信仰の一致と知識の一致」が出てくる エペソ4:13節に注目してください。このように書かれています。

「ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致に達し、完全に大人になって、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するためです。」この下線部分に気をつけていただきたいのです。

ちなみに口語訳聖書と新共同訳聖書のこの部分も読んで、整理してみましょう。

新改訳は「信仰の一致と、神の御子に関する知識の一致」

口語訳「神の子を信じる信仰の一致と、彼を知る知識の一致」

新共同訳「神の子に対する信仰と知識においてひとつ」

それぞれの訳文は多少違っていますが、意味しているところは、3つとも同じだということが分かります。しかし、問題なのは、どういった内容の信仰と知識なのか、ということです。

新改訳は「イエスについての信仰と知識」、

口語訳は、「イエスを信じる信仰と、イエスを知る知識」と言っている。

新共同訳は、「イエスに対する信仰と知識」と言っている。

つまり、信仰だけを取り上げて言いますと、この訳のどれもが「イエスを信じる信仰」という扱いになっています。この箇所ではイエスを信仰の対象、あるいは、目的としています。もしこの箇所が単にイエスを対象とした信仰、あるいは、イエスという方についての知識でないとしたら、もし、そうだとしたら、どうなるでしょう。私はいたずらにことを複雑にしようとしてはいません。真理を見極めようとすれば、ここまで入り込まざるを得ないのです。この箇所の原文を見てみましょう。

ヘブライ語かと思ったら、今度はヘブライ語かと思わないでください。(32 ページ参照) いいですか、ここに並べて書いてありますけれど、まあ、ギリシア語の文字とか、こんなのはうっちゃっといってもいいんですけど、テース ピステオース カイ テース エピグノーセオース トウー フユイウー トウー セウーという言葉、ピステオースは信仰なんです。と カイ (知識 (の) テース エピグノーセオース、このオースが、~のなんですけど、下のトウー フユイウーというのは、フユイウーというのは、息子ね、成熟した息子ですよ。前に言いましたよね。トウー セウーというのは神のということなんです。ここに (の) という言葉にカッコしていますけれど、これ、注目。これ、そのまま訳すと、神の子の「信仰と知識」、つまり、「神の子の信仰と知識の一致」っていうことになるんです。それに到達することになっているわけです。

ところが、ここが問題なんです。「ちょっと待てよ」と、「日本語の訳では、神の御子についての、神の御子に関する、信仰じゃなかったの？」と、皆さん、言われますか？イエス・キリストを信仰の対象とした「イエス の信仰」？ それとも「イエス を 信じる信仰」？ギリシャ語原文ではなんと書いてあるんでしょうか。「イエスの信仰」そして、イエスについての知識ではなくて、ここで言うなら、「イエスの持っていた知識」ということになるじゃあないですか。この違

い、わかりますか？考えてみて下さい。

ギリシャ語原文は、「イエスの持っていた信仰」、「イエスの知識」というニュアンスなのに、なんで日本語訳文は「イエスについての信仰と知識」というんでしょうか。これについて実は、昔から、微妙だなと言われていた問題箇所なんです。今日初めて聞くかも分からないけど。聖書をギリシャ語原文で読んでいく人たちは、こういうところに目が止まっちゃうんです。これは、単なる「属格」と言って、例えば、私のスマホ、私の水、これ私の本、というようなもので、それを私の所有を現わす「属格」というんです。それを、この私のスマホについてとか、この私の水についてとか言うのとは、意味が違うでしょ。違いますよね。ここで言っているのは、「神の子イエスの持っている水」、「神の子の持っている信仰」のことを言っているんです。イエスが持っていた、現わしていた、ご自身の信仰と知識、わたしが話すことは、父から聞いたものだとイエス様は言われた。その「イエス様の知識」です。啓示のことなんです。

ギリシャ語の原文では、「神の子の持っている信仰」「イエスの持っていた知識」だと、そう解釈して読めるのに、・・・「え？我々イエス様を対象として信心の対象として、信心を拝んできたじゃない。」「意味、分かんないじゃあないですか。」と、つまり「キリストを対象として信じる信仰で通してきたので、今までの信仰概念でいくと、「意味が分からなくなる」「それを“イエスの持っている信仰”という言い方は、間違っている」そう言って、・・・。

また、「これは、古代ギリシャ語の言い方の妙であろうと、つまり、属格で表現されているんだけど、“～を”っていう対象物を“の”という言い方をしちゃうんじゃないか。」「2000年前の古典原語ですよ。ですから、属格と対格の峻別というものがなかった時代だろう」と解釈して「属格で書かれてあるのを対格で訳すようにしましょう。」と言って、それで、「この事の区別をもっとつけるには、文脈で判断しましょう。」ということになったんです。それ以後、もう、従来、重々と、このところは、「ああだ、こうだ」と言われてきているんです。

「属格で取ったら、ああ、その方が聖書全巻に、・・・非常に全巻筋が通ることになるぞ」と、「私は、・・・」そう言っているのは私だけじゃないですよ。何人もの人が昔から、そう取っているけれども、主流としては、各国あっちこっち翻訳されている中では、対格解釈になっていることが多いんです。でも今でもずっと、これは「イエスの持っていた信仰」と言う表現が、パウロの言いたかったことであるまいかと・・・。皆さん、その書店に行つてあるかないか、ないかもしれないけど、「イエス・キリストの信仰」という本が、2,3年前に翻訳されて、教文館から出ているんだけど、知ってる？リチャード・ヘイズです。翻訳されて出版されたんです。イエス・キリストの信仰なのか、イエス・キリストについての信仰なのか、この一点に、聖書の議論を集中させて、あっちこっちから、歴史書からも検証されているという、ものすごく細やかな難解な論文です。それを訳文にしたからもっと分かりにくいんです。皆さんどうぞ、我こそはという方は挑戦して読んでみて下さい。折角、これはという本が出たんだけど、さっぱり売れてない。「そんな本、好き好んで、読むかいな」って。(笑)私は読みましたけれど、目を通しましたけれど、要するに言いたいのは、イエス・キリストの信仰ということの方が、パウロの言いたかったことではあるまいかと、言うことを言いたい。皆さんは、どっち取りますか。どうぞ好きな方を取って下さい。

33 ページの 2 つ目の段落のところから、

要するに、三訳の訳し方の説明としては、「属格を訳す場合」、「“神の子の信仰”のように、神の子の所属・所有を表す主格的属格」と、「“神の子を信じる信仰”のような目的格属格」があります。そしてこのどちらで訳すかは、本文そのものでは分からず、文脈や意味内容などによって判断するしかありません。この箇所が「イエスに対する信仰と知識の一致」ではなく、「イエス・キリストの信仰と知識の一致」でこの原文を読めばどうでしょう。

「私はイエスにおり、イエスは私にいる」という相互内在の奥義から、この原文を読めば、どうでしょう。私たちはそんなにいつまでも、イエスに関しての知識のみを求め、イエスとは誰なのについての啓示と理論のみを求めているのでしょうか。イエスとは誰なのかという啓示は、救いに入る時に最低限必要な啓示です。それよりもむしろ、私たちは「御霊の一致」の土台からは始めて、イエス自身の持っていた知識と、イエス自身の持っていた信仰に至りたいのです。私の内なる御霊と、イエスの内なる御霊が一人のお方ならば、あまりにも当然ではありませんか。イエスについての知識をいくら持ったとしても、私たちはイエス・キリストの身丈にはなりません。イエスをどのように、どれほど信じるかという信仰において私たちが一致したとしても、頭なるキリストの満ち満ちた身丈には達しません。身丈に達するのは、キリストの持っていた知識と啓示、そしてキリストの持っていた信仰に、私たちが至る時です。

39 ページ (一番下の段)

「神の子に対する信仰と知識の一致」という訳で問題にならないと考えてしまうのは、私たち信者が、あくまでもイエスとは別個にイエスの外に置かれていて、イエスはいつまでも信者の礼拝対象でしかなく、人間とイエスの越えがたい断絶を想定しているからです。確かにそういった理解で、これまでの時代はまだ乗り越えられたでしょう。しかし、この過渡の時代、真理のヴェールが次々と剥がされ、人々の霊に回復されたみことばがダイレクトに御霊によって語られています。多くの礼拝者たちはまだ何が起っているか理解はしていないけれども、霊は沸騰してきています。この時代の神の働きを十全に受け取っていこうとすれば、従来の訳では受け取れられません。霊の啓示はあふれ出しています。これからの御国の時代にふさわしい革袋を準備する必要があります。

ですから、そのままの訳で、エペソ 4 章 13 節あたりを読んでみましょう。

「こうしてキリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師としてお立てになったのです。それは、それは聖徒たちを整えて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、ついに、私たちがみな、神の子の信仰と知識の一致に達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するためです。それは私たちがもはや子供ではなくて、人の悪巧みや人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹きまわされたり、波にもて遊ばれたりすることがなく、むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆることにおいて成長し、頭なるキリストに達することができるためなのです。」

日本語の訳の中でもその新契約聖書という私訳で永井先生が書いている訳がこれと同じです。

日本語訳にもあります。さあ、今読んだ言葉、その受け取り方でいくと、うんと、違うと思いませんか。だから、35 ページにあってね、太字で書いてあるこういう箇所がいっぱいあるんです。同じエペソ人への中から取り上げるなら、

エペソ 3 章 12 節「私たちはこのキリストにあり、キリストを信じる信仰によって、大胆に確信を持って神に近づくことができるのです。アーメン！ですが、これ、キリストを信じる信仰っていう風には書いていませんからね。次、太い矢印があって、ここは次のように訳すことができます。

↓

「私たちはキリストの中で、キリストの信仰によって、大胆に確信をもって神に近づくことができるのです。」どうですか。えーって。えーっと、思うけど、ですよね。って、納得できませんか。相互内在が啓示、現実だとすれば、ですよ。

次、エペソ 1 章 15 節、「こういうわけで、私は主イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対する愛とを聞いて、」イエスに対するあなたがたの信仰という言い方はされていませんから。意識ですから。ここはその下の矢印

↓

「こういうわけで、私は主イエスの中にいるあなたがたの信仰とすべての聖徒に対する愛を聞いて、」と言える。

ガラテヤ 2 章 16 節「しかし、人は律法の行いによっては義と認められず、ただキリスト・イエスを信じる信仰によって義と認められる、ということを知ったからこそ、私たちもキリスト・イエスを信じたのです。これは律法の行いによってではなく、キリストを信じる信仰によって義と認められるためなのです。」ここもね

↓

「しかし、人は律法の行いによっては義と認められず、ただキリスト・イエスの信仰によって義と認められる、ということを知ったからこそ、私たちもキリスト・イエスを信じたのです。これは律法の行いによってではなく、キリストの信仰によって義と認められるためなのです。」

“イエスを信じることによって、”というイエスを対象として、イエスを信じるという言い方もされていますよ。それによって私たちは、「信仰」、神との関係に入るんです。入るんですけど。入ったんですけど、その後、私たちはどこにいるのか、「キリストの中におり」、そして「キリストの信仰」「我々の信仰」という言い方、我々は、信じる信仰を持つべきだけど、キリストの贖い、キリストの持っていた啓示、キリストの贖いの業とキリストの信仰のゆえに、我々は完全に神の中で、包まれて義とされているのだ。

36 ページの真ん中辺の太い文字、ローマ 3 章 21, 22 節

「しかし、今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によって、あかしされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストの信仰による神の義であって、それはすべて信じる人に

与えられ、何の差別もありません。

その次、重要なところ、ここ注意です。36 ページの下の段、

「イエス・キリストの信仰」を持つことによって、義とされると書かれています。それでは、私たちの信仰が、あのイエスのような完璧な欠けのない信仰にならないと救われれないということでしょうか。そうではなく、完璧な欠けのないイエスの信仰が、神から無代価で提供されているということです。初めは、イエスの話を聞き、イエスを対象として信じたとしても、その一瞬のうちに、生まれ変わりをした人には、誰にも公平にこのイエスの信仰が与えられています。信仰はイエスが始められ、自分で造り出し、絞り出す者ではありません。「信仰は賜物である」が聖書の理解です。(使徒 3:16、ローマ 12:3、エペソ 2:8、ピリピ 1:29)。この信仰は、「イエスが完成された信仰です。私たちが何も手を加える必要はありません。」(ヘブル 12:2) でしょ。はい、

37 ページ、上のローマ書 3 章のみことばによると、「今や、律法とは別の神の義が示された。その神の義とは、イエス・キリストが持っていた信仰だった。イエスの信仰の中に、神は完全なご自身の義を人類に提示された」のです。そのことが、続いて 3 章 25 節に明確にされています。

「神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。」その下の

「それは、今の時にご自身の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。」

下線部「イエスを信じる者」の部分は「イエスの信仰の者を」という訳が正確です。したがって、「イエスの信仰の者を義と認めるため」という意味になります。森羅万象を神として拝んでいた人が、ある日、木や石の代わりにイエスを持ってきて、信心の対象にしたからといって、義とされるとは、聖書は教えていません。「イエスを信じる者」というだけであれば、このあたりが正確に定義されていません。しかし、原典では定義されているのです。「イエスの信仰の者」が義とされるのです。「イエスの信仰の者」と言うんです。それが、イエス野郎ですよ。キリスト野郎ですよ。それを「クリスチャン」というんですよ。

ここで私たちは生まれ変わりの祈りをする時にどういう変化が実態的に起こっているかを知る必要があります。ローマ 10 章 9、10 節によると、救いに入る条件として、2 つが掲げられています。「あなたの口でイエスを主と告発し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせて下さったと信じるなら、あなたは救われる」ということです。この 2 つの事をする事によって、あなたに何が起こったのでしょうか。

イエスを主と告白することによって、何が起こったのですか？

それは、「自分がイエスに属した」という出来事です。イエスの中に入りました。自分が属し、自分をおおい、包み、守って下さる方を我々は、主と呼ぶのです。たとえそれが誰であっても、その中に入っているなら、あなたはその方を主としています。

では、あなたがイエスに属した出来事のあとで、
神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じることによって、何が起きている
 のでしょうか？

それは、あなたのよみがえりです。あなたの勝利が決定されました。なぜなら、
 神が人の中から、イエスをよみがえらせた、そのイエスの中に、あなたはいたからです。
このイエスに、あなたも含まれていました。神が、ほかならぬ神がそのようにされたと、
 あなたの心で信じる時、あなたは救われるのです。

とっても大事な微妙なことを、今、後半やっていますよ。どうですか。これだけ難しいことを
 頭の中で考えたら、もう、このあと眠ってしまいそうですか。いいですよ。でも明日また読みま
 しょう。いいですか、方向付けが来たんです。優柔不断に、ぼやーっと、そのことを捉えて一週
 間を送ったら、元に戻っていますから。いいですか、ここ肝心なところ。

39 ページ、「イエス・キリストを信じる」ということ)

では、「イエス・キリストを信じて救われる」、このことばは間違っていたのでしょうか。
 いいえ、正しい言葉です。私はこれを否定しているのではなく、「この言葉の本来意味している
 ところを、再発見すべき時が来た」と言っているのです。この真相を意識化し、言語化し、来る
 べき偉大な御国の奥義を受け取る革袋を用意する時が来ています。

イエスの信仰が私の中に来ていることが、《私の中にいるイエス》だということが明確になっ
 たとしても、「イエス・キリストを信じる」という言葉は、永遠の聖書の言葉としてなくなりませ
 せん。ガラテヤ 2 章 16 節を再び読むと、「しかし、人は律法の行いによっては、義と認められず、
 ただキリスト・イエスの信仰によって義と認められる、ということを知ったからこそ、私たちも
 キリスト・イエスを信じたのです。これは律法の行いによってではなく、キリストの（持ってい
 たその）信仰によって、完全に義と認められるためなのです。」
イエスの信仰によって義と認められると知ったから、私たちはイエスを信じたと言っています。

その下のギリシャ語の原文、これもちょっと見て下さい。カーイ ～もまた、ヘメイス 私
 たち、エイス ～の中へ、クリストーン キリストを、イエスー イエスを、信じた、こ
 の私たちはイエスを信じたという対象として、これは書いてあります。イエスを信仰の対象とし
 て表現しています。けど、ここの言い方、面白いんです。ギリシャ語の中でね、普通～の中にと
 いうのは、エンと書くんですよ。こういう字で、(ホワイトボードにギリシャ語のエイス、～の中
 へ を書かれる。)エン、英語のこれが in なんです。ところが、in ではなくて、(ギリシャ語
 の)エイス、という言葉が、in と書かないでエイスと書いてあるんです。これはどういう事かと
 いうと、英語で言えば、in to～という表現に似ているのです。だから私たちがイエスを対象とし
 て信じるというのは、物凄く、ダイナミックであり、動的な表現なんです。いいですね、だから、
イエスの中に注ぎ込むように自分を、そうする動作を、イエスを信じるという言い方をわざわざ
 したわけです。このエイス (in to) を使うのは、対象が、キリストだけ、イエスだけ、神だけ、
 ほとんどがそうなんです。例えば、「私は、あなたを信じます」と言う時にエイスは使いません。
 それは使えません。人間同士で、「あなたを信じます」という時は使いません。

「イエスを信じろ！」という時は、もう自分の全存在を「あなたの中に私、突撃させますよー」という、動的な表現なんです。面白い表現なんです。「昨日まで私は、そこにある石を拜んでいました。」と言う人がね、「ああ、今日ね、息子から言われたんでね。イエス・キリストにした方がいいよってね、言われたから、イエス・キリストって、柱に書いてね、パチパチって、昨日からやっていますわ。」と、・・・それじゃあない。それとは全然違う。注ぎ込むようにという表現がされているということです。いいですね。

さてさて、いいですか、もうちょっと 41 ページのさわりだけ行って今回は留めておきましょう。

《イエスの信仰を使って生きる》

「イエスを信じる信仰」という箇所が、本来「イエスの持っている信仰」だということで、新約聖書のあらゆる聖句から得るところは絶大です。ガラテヤ 2 章 20 節のみことばは、私たちの生活を現わす代表的なみことばです。いいですか、もう一遍、ここを読み直すと、「私はキリストとともに十字架に付けられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私の内に生きておられるのです。アーメン！そうですね。いま私が、この世に生きているとすれば、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子の持っていたそのイエスの信仰によって、今や私は生きているのです。と、言っているわけです。 どうですか。

「神の御子を信じる信仰によって生きる」のではなく、「神の御子の信仰で私は生きているのです。」何で御子の信仰が我々の中にあるのか、どういう、つてで？分かりますか。 その信仰を聖霊が持っているからです。我々の内なる御霊は、我々を神の御子と言われるぐらいの成熟したフイオス、子にして、被造物が贖われるのを待ち望んでいるが如く、我々に期待されているのです。

しかしながら、「私はイエスの信仰で生きる」と言っても、かけ声だけで、実際の生活は、イエスの信仰に全く及ばないと感じています。イエスの弟子たちも、当時、そのように感じていたのでしょう。さんざん悩んだ末に、彼らは思い切ってイエスにお願いしたのです。「私たちの信仰を増して下さい。」ルカ 17 章 5 節 ところが、イエスの答えは弟子たちの質問にトンチンカンなものでした。「そうだそうだ、君たちの信仰は本当に少ない。もっと増やさなければ」とは言わず、

「もし、あなたがたにからし種ほどの信仰があったなら、この桑の木に『根こそぎ海の中に植われ』と言え、言いつけどうりになるのです」でした。つまり、信仰の量ではなく、私たちの中に与えられているからし種のほどのイエスの信仰を使うかどうかが問題だということです。

集会へ行く電車賃がない時、将来の進む道が分からない時、迫害された時、友が病いに倒れた時、サタンが誘惑する時、危険な状況に陥った時、神から受けた勤めを遂行する時、私たちの中にはイエスの信仰が与えられています。使い始めは、確かにからし種ほどの小さなものかもしれませんが、多分、「こんなものが、あのイエスの信仰であるはずがない」と思ってしまうでしょう。でも、自分の内のありったけのイエスの知識と啓示によって、信仰を持ち、それを行動に移していくことです。次第に、イエスの知識・知恵・啓示・人格・能力が、使えば使うほど、流れ出て来るでしょう。

今、イエスをご自身の信仰をどこで使えるのでしょうか。あなたの中においてです。あなたがイエスの信仰を使わなければ、イエスご自身は手も足も出ません。イエスは、あなたに委ねられた

存在なんです。あなた次第のイエスなのです。「おぉー！」いま、イエスの働きを制限できるのは、サタンではありません。あなたとわたしなのです。これが、《私の中にいるイエス》という主との関係の、もう一方です。 はい、42 ページの途中まで。頑張って読みました。

さあ、方向性に、優柔不断で見過ごすことがないようにしましょう。いいですか。

さあ、時間が時間です。何か、聞き逃してしまったこと、あそこはどうですか、ここはどうですかという確認したいことがありますか。あるいは質問がありますか。どうでしょう。こういうことを読んだ後で、そうやすやすと、でないかもわかりませんね。来月の時の頭の初めに言ってください。でも結構です。どうぞ、みことばはたくさんあります。自分の聖書で、ゆっくり確認しながら、消化していってください。 どうでしょう。大丈夫ですか。ゆっくり、聖書を繰り返しながら、併せ持って、鉛筆を片手に持って、どうぞ、聖書の中にしるしをつけながら、ゆっくり、食べて下さい。みことばを食べて下さい。 はい、知識とするのではなく、御霊とともによーく静まって、確認してください。大丈夫ですか。

質問「先生、属格と対格がどっちがどっちか分からなくなって・・・」。属格というのは属する、“所属する”の属ね、これは私の水、私に属する水、という場合が私の、イエス様の持っていた所属している信仰という場合、の、属格なんです。で、対象とする場合は、その目的とする、対象とするわけです。イエス、これは私の水を、私は信じます。おいしいと信じますと。対象としてあるわけですよ。いいですか、今、属格と目的、対象とする格が分からないという質問でしたから、説明しました。他に「どうも、そこの理解がね」という時は、どうぞ遠慮なく、この時間外でも訪ねてください。はい。録音もアップされます。来月一か月の間、時間はたっぷりあるでしょうから、それを聞いてください。

天を造り出し、地を引き延べ、いのちの息吹を注がれた御神の力受け、いざ立てや 主がはっきりと、無方向性の状態から、我々を呼び出し、方向性を呼び出しています。しっかり答える者になりましょう。主の語りかけに。